

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00291

研究課題名(和文) 文人建部綾足の総合的研究

研究課題名(英文) The general research on TAKEBE Ayatari

研究代表者

長島 弘明(NAGASHIMA, Hiroaki)

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：00138182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)： 建部綾足の多方面にわたる業績 - 俳諧、和歌、小説、国学、絵画等 - を総合的に再検討し、次のような成果を得た。

発句が賛として記されている綾足の画は、人物や猫、象等の動物が描かれ、滑稽・飄逸な味わいがあるものが多い。後年、古代の詩歌形式である片歌を記すようになると、描かれるのは水鳥や苦船など、漢画の題材と共通する伝統的な題材が多くなり、滑稽味もなくなってくる。また『西山物語』を書いた綾足意図の一つは、和文(擬古文)を書くための一種の教科書を提供することだったと思われる。国学者として王朝古典の文体を研究した成果を、自らの創作に生かした実践例として門人達に示したのが、この『西山物語』である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

建部綾足の俳諧、和歌、小説、国学、絵画等の諸領域における業績は、従来、その領域ごとに限って検討されるのを常としてきた。すなわち、俳諧を検討するときには、絵画の業績が顧慮されることはなかった。しかし例えば、絵画と俳諧・片歌・和歌等の詩歌が一体になった画賛を綾足は沢山残しており、綾足作品においては絵画研究と詩歌研究は不可分である。

今回の研究では、意図的に複数の領域にまたがる研究的な視座から、綾足を論じた。例えば、絵画と俳諧が交差する俳画、小説と国学研究が交差する和文読本『西山物語』などを取り上げ、複数の領域を自由に行き来する綾足精神の有りようを、この時期の文人の一典型として明らかにした。

研究成果の概要(英文)： A comprehensive re-examination of TAKEBE Ayatari's multifaceted achievements-haikai, waka, novels, kokugaku, painting, and more-has yielded the following outcomes:

(1) Ayatari's paintings, where haikai hokku are inscribed as captions, often depict figures, cats, elephants, and other animals, imbued with a humorous and whimsical charm. In later years, as he began to inscribe katauta, an ancient poetic form, the subjects depicted shifted to more traditional themes common in Chinese painting, such as waterfowl and thatched boats, losing some of the humorous elements.

(2) One of Ayatari's intentions in writing the novel "Nishiyama Monogatari" seems to have been to provide a sort of textbook for writing in classical Japanese (giko-bun). He demonstrated to his disciples, through this work, how he applied the results of his research into the literary style of ancient court classics as a practitioner of kokugaku.

研究分野：日本近世文学

キーワード：建部綾足 画賛 和文読本 国学 片歌 文人

## 1. 研究開始当初の背景

かつて私もその編者の一人であった『建部綾足全集』では、諸般の事情から肉筆の絵画の収載を見送ったため、画業と文事が不可分である綾足の業績の全体が、はなはだ見えにくくなってしまった。

また、俳諧・物語・国学・画譜等のジャンル別の巻立てのために、物語は物語としてだけ考察しがちになり、物語と国学・絵画との関係に気づきにくくなっている。しかし例えば、奈良時代・平安時代の古語を駆使した和文読本『西山物語』の執筆は、俳諧を捨てて片歌という古代の詩型を選んだ、片歌唱道と一対の関係にある。

さらにいえば、賀茂真淵への入門、『伊勢物語』『万葉集』の講義や注釈書の刊行など、この時期の国学へののめり込みも、和文読本執筆や片歌唱道と一つのものである。これらの違ったジャンルの成果を、一つの有機的な業績として把握することこそ、文人綾足の真の姿をとらえることに繋がるのではなからうか。そういう観点から研究を進めたいと思った。

## 2. 研究の目的

建部綾足は近世中期の典型的な文人である。その多芸多能のありさまは、多才をもって知られる柳里恭や平賀源内に匹敵する。しかし文人の真価は、それぞれの領域で成し遂げたことの総和にあるのではなく、多領域にまたがって活動しながら、すべての領域を貫く一つのゆるぎない精神。それは彼独自の精神であるが確立されているところにある。綾足の文学史上・学芸史上・絵画史上の価値は、『西山物語』『本朝水滸伝』『由良物語』『折々草』という優れた和文読本・和文随筆を書いた上に、『詞草小苑』という至便な枕詞辞典を編み、加えて、密画から俳画におよぶ幅広い筆致の絵を描いたという、それぞれのジャンルでの活躍を総計した点数ではかられるわけではない。綾足の価値は、韻文・散文の文業、国学研究、画業を貫く、綾足独自の文人精神のあり方にあるのである。それぞれの個別領域における綾足作品の研究は、俳諧や片歌については中興期俳人の中の一人として、和文読本に関しては『西山物語』が和文読本の嚆矢ということで、ある程度まで進んではいた。しかし、綾足の文業・画業全体を、文人精神の帰結としての有機体として考察しようとした研究は皆無といっても過言ではなかった。そういう方向から綾足の全活動を考察し直し、綾足の文人精神の独自性を闡明することが、本研究の目的であった。近世小説研究の分野や、国学研究の分野で、本研究が個別に新たに付け加える発見もあったが、それは主目的ではなく、建部綾足という文人の、精神の統合された全体像を描き出すことこそが主目的であった。

## 3. 研究の方法

具体的には、各年度次のような手順と方法で研究を進めた。

まず、初年度の2021年度は、俳諧・片歌・和歌等の短詩型作品と、物語・絵画との関係を中心に考察する。絵画と短詩型文学の関係の考察には、絵と句歌をともに含んでいる画賛が恰好の考察対象となった。

2年目の2022年度は、和文読本を考察の中心に据えた。『西山物語』の綾足の自注(語注)を精査し、『西山物語』の語彙と『歌文要語』等の綾足編の古語集を比較した。また『本朝水滸伝』と『詞草小苑』等を比較しつつ、綾足における物語と国学(特に古語研究)の一体化の様相を明らかにした。

最終年度に当たる3年目の2023年度は、画賛以外の漢画・俳画(『本朝水滸伝』等の)挿絵における画題・画材に留意しながら、それと同題材の句歌や物語の場面と比較して、絵と句歌・物語の親密な交渉を考察した。

## 4. 研究成果

3年にわたる研究で以下のような研究成果を得た。

1. 綾足の自画賛を検討し、賛として書き込まれている句歌と絵の関係を考察した結果、賛として片歌唱道以前の俳諧発句が記されているものは、句も画も滑稽味があるものが少なくない。それが片歌唱道の時代になると、描かれる画も漢画の題材にもなり得るような伝統的な題材が多くなり、賛として記される片歌は、ジャンルとしての特性もあって滑稽味がなくなっている。

2. 俳画における画と賛句の関係であるが、もちろん画賛そのものの作成手順としては、画が描かれるのと、句が書き付けられるのは、原則として同時である。

しかし、その句自体は以前に詠まれた旧作であることが多いことが、画賛の署名(俳号)等から推測される。

3. 綾足自画と推測される『本朝水滸伝』の挿絵と本文の関係は、ある意味では、自画賛における画と賛の関係と類似している。俳画において、賛句が単なる画の説明になってしまうことを避けるため、画は賛句と微妙な点で異なるように描かれることが多いが、『本朝水滸伝』の挿絵にも、同様の意識が感じられる。

4. 片歌唱道以前の俳諧の歳旦帳には、綾足自画の挿絵があるものが少なくないが、これは発

句を賛とした自画賛の画と同じ意識で描かれている。もっとも歳旦帳という制約のもとで、必然的に歳末・新年の景物が主となってしまいうため、画賛ほどには画がバラエティに富んでいず、また滑稽・飄逸身もやや薄くなっている。

5. 『西山物語』において、綾足自らによる語注（主として、その語の出典を明示する注）を施したのは、『西山物語』を書いた意図の一つが、和文（擬古文）を書くための一種の教科書を提供することであったからだと思われる。おそらく綾足の考えでは、物語体（物語の文体）は、多様な和文体の文章の中でももっとも重要な文体であり、その物語体の創作方法を、実例をもって懇切丁寧に示した、いわば実践例が『西山物語』だということになる。

6. 『歌文要語』に採られている和語（歌語）の出典は、さまざまな古典に及んでいるが、中でも『万葉集』と『源氏物語』がかなり多い。一方、『西山物語』の語注にある出典を見ると、確かに両書に出拠がある語は少なくないが、『源氏物語』の書名は、『歌文要語』ほどには目だたないように思われる。『西山物語』には、記紀の書名がやや多いように見受けられる。『西山物語』は、和文体といっても全体的に見て、王朝物語の標準的な和文よりもやや古い文体になっているような印象があるが、それは、和語の用語選択が、王朝以前のものを中心に選んでいるからかもしれない。

7. 『本朝水滸伝』前・後篇には出典注記がないが、和語の出典を考察して行くと、やはり『西山物語』と同様、『万葉集』記紀など奈良時代の古典を主要な出拠にしていることがわかる。『本朝水滸伝』の執筆時期は、綾足が『万葉集』研究に特に力を入れていた時期と重なり、また『万葉集』を重要な用例採取元としている、枕詞辞典『詞草小苑』の編纂時期とも重なっている。『本朝水滸伝』にとりわけ『万葉集』由来の語が多いのも、そうした理由からであろう。

8. 動物や鳥類にしろ、花や植物にしろ、綾足が漢画・俳画・挿絵に好んで描く題材は、句歌、特に俳諧の発句にほとんど取り上げられている。ただし、綾足が絵画で偏愛した独特な題材の海錯（魚類）は、季題になりにくいこともあって、これらは句歌、物語等にはほとんど出て来ない。

9. 格式張った漢画は、山水にせよ動植物・人物にせよ、伝統的な画題や画法に制約されることが多いため、俳画（略画）の方が、句歌と共通する題材が多く、かつ句歌が描きとっている情緒とも重なることが多い。

10. 俳画は、画単独で描かれたものはかなり少なく、賛を付された画賛の形を取る物が多い。因みに、賛は和歌よりも、発句（または片歌）が圧倒的に多い。

11. 版行された綾足の画譜の中には、通常の漢画の画譜には入っていないような滑稽味を備えた画がある。例えば『孟喬和漢雑画』巻五の「猫児咬鳥」は、猫が小鳥に飛びかかり、前足で小鳥を押さえながら咬み伏せる一瞬を描き取っているが、猫の爛々と耀く目からは、明らかに滑稽味・俳諧味をうかがうことができる。多分この画には、俳諧からの影響があるのであろう。もう少し説明を加えれば、短いことばで劇的な一瞬を切り取る発句の方法を、描画の方法へと援用したもので、恐らくは綾足の頭の中では、この場面を発句で詠むことが無意識的に試みられ、それが絵画という、別の表現方法に移されたところにこの画が成立していると思われる。蕪村なども若干似たところがないではないが、画家であるとともに俳人でもある綾足に顕著な画の発想とすることができる。

研究成果の一端をここに記す。

#### 新出画賛一覧

1. 蝸牛自画賛 水墨 片歌賛 扇面 一本

本紙18.5×47.6センチ

久左武良耳声奈伎虫毛秋止来耳祁理 綾足

（くさむらに声なき虫も秋と来にけり）新出歌。

2. 苦舟自画賛 水墨 片歌賛 一軸

本紙40.0×55.1センチ

あやしきいそわに舟はてしときよめる

さなきだに物こひしきのきあて鳴なり 安也太理

3. ことし竹自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙101.4×26.0センチ

影をのむ鮎は老けりことし竹 涼岱 印（白文朱印「吸露菴主人」）印（朱文「涼岱之印」）新出句。

4. 移竹自画賛 水墨 片歌賛 一軸

本紙106.1×25.3センチ

宇都之宇恵之竹乃夕加解伊泥也伊止波武

(うつしうゑし竹の夕かげいでやいとむ)

加太宇太能美致母理 安夜太利

竹画の傍らに「移竹半洞」。

5. 猫と蝶自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙27.6×61.4センチ

喰さいた文は蝶なり猫の恋 印(朱文「涼袋之印」)

6. 蘭自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙67.3×22.3センチ

香をとめる身はゞはせまし蘭の花 涼袋 印(白文朱印「吸露菴主人」)

新出句。

7. 橋の月自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙116.6×56.1センチ

夜ならばあぶなき橋やけふのつき 涼袋 印(白文朱印「涼袋」)

新出句。

8. 象と七夕画賛 淡彩 俳諧発句賛 一軸

本紙28.8×55.4センチ

象の背の疵も見捨てほしの恋 涼袋 印(白文朱印「吸露菴主人」)

画は綾足ではなく別人作か。

9. 千鳥自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙30.0×50.8センチ

風の実のいまこそみゆれむらちどり 涼袋 印(白文朱印「凌岱」)

10. 七夕自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙31.5×44.0センチ

天川からふたりかへるや哥あはせ 涼袋 印(白文朱印「涼袋」)

新出句。

11. ほととぎす自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸(写しか)

本紙91.0×27.6センチ

やよひの末初音を聞て

行雲もまだ春風やほととぎす

吸露菴主人 印(「孟喬」「孟」白文朱印「喬」朱文白印の連印) 新出句。

12. 鳥居自画賛 水墨 片歌賛 一軸

本紙106.7×27.4センチ

のゝみやに知らぬとりみやけさの雪 あやたり 印印(「凌岱」「孟喬」白文朱印連印)

13. ほととぎす自画賛 水墨 俳諧発句賛 一軸

本紙31.1×50.7センチ

おもしろい苦をまうけたりほととぎす 涼袋 印(「涼袋」)

14. 菊画賛(玉瀾画・綾足賛賛) 俳諧発句賛 一軸(写しか)

本紙80.3×27.0センチ

きくの花秋や寒しとかさねつる あやたり

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------